

編集後記

木簡学会が昨年度末に発足して七ヶ月がすぎました。本学会の年度の切りをいつにするかは次回の大会で決めなければなりませんが、早くもその第一回大会を準備しなければならぬ時期をむかえました。期間が短いこともあって、大会で報告してもらえる新出の木簡はそう多くはありません。それでも、滋賀県高島郡の鴨遺跡で出土した、一・六尺もある「貞觀十五年」の墨書板などは、つぎの大会で大いに話題を提供することになるでしょう。

さて、会員の皆さまのお力添えにより、本会の会誌「木簡研究」の創刊号が、ともにかくにも、このような形で世に出ることになりましたことを、皆さまとともによろこびたいとおもいます。

まずもって、本号に原稿を寄せて頂いた方々に御礼を申し上げる次第です。実に多くの方々に執筆をお願いし、当初の予定通りほぼ原稿をそろえることができました。会誌のいわば第一部にあたる前年度出土の木簡につきましては、各地で木簡の検出にタッチされた担当の方に直接執筆をお願いし、現地からホットなニュースを送つていいただきました。木簡の情報源にあたるこの部分は、読者がもつともこの会誌に期待されているところでしょうから、読者の皆さまのご意見をいただきながら今後ともいろいろと工夫をこらしていきたいと考えています。

第二部の論考篇には、大庭、平川、鬼頭、今泉の諸氏が原稿を寄

せて下さいました。いずれも創刊号を飾るにふさわしい力作です。ご熟読下さい。また、田中琢氏には、平城宮木簡をはじめてみつけた当時のことを、調査日誌をひもどき事実関係を復原してもらいました。関係者の興奮のさまが、鮮明に伝わってくるようです。表紙の題字は本会の長老藤枝晃先生が渡欧直前の多忙な時間をさいて、石膏材に陽刻して下さったものの拓影です。千二百年間土中にあって風化にたえつづけてきた木簡の文字の感じが出ています。

本号の編集は、委員諸氏のご意見をうかがいながら、佐藤・鬼頭両氏をはじめとする幹事諸氏が進めてくれました。編集会議では、創刊号ですから、本の体裁から紙面のつくり方の細部までが議論の対象になり、岸会長も加わって、一日まるまるつぶして熱心な討論が行なわれたこともありました。岸会長と小生がたまたま別の用件で上京した折には、在京の委員・監事のご意見もうかがいました。かくして誕生をみた本誌ですが、最後に巻頭の図版をかざった木簡の写真や挿図用の写真・図面を提供していただいた諸機関や個人の方々に厚く御礼を申し上げます。また、会員をはじめとする読者の皆さまの今後一層のご指導・ご援助をお願いしておきます。

（狩野 久